

●呼吸窮迫症候群（RDS）

早産児で見られる呼吸障害で最も頻度が高く、20世紀末までは早産児の主な死因でした。サーファクタントという肺胞（新生児一過性多呼吸の項目を参照）を膨らませておく物質の不足が原因です。

胎児の肺胞はしぼんだ風船のようになっていますが、正期産児ではひとたび呼吸を開始して空気を吸い込み膨らむとサーファクタントが肺胞を内貼りして再びしぼまないようにしています。

ところがサーファクタントは在胎 24 週ころには肺胞内に産生され始めるものの 34 週ころまでは不十分です。しぼんだ風船を膨らませるとほっぺたが痛くなるのと同じように、肺胞も一から膨らませるには大きな力が必要です。これを呼吸の度に毎回やっているとついには力尽きて肺を膨らませられなくなり、呼吸不全に陥ります。1987 年からは人工のサーファクタントが使用できるようになったため、RDS で命を落とす赤ちゃんは激減しました。生後数日すると早産児でも自分の力でサーファクタントを産生できるようになります。